

チリ共和国におけるシニア海外ボランティア体験記

JICA兵庫OV会 小海英夫

派遣期間： 2005年11月～2007年11月

派遣先：チリ共和国 第6州カルデナロ県ピチレム市 カルデナロ県庁

指導科目：下水処理技術を含む都市衛生教育

チリ共和国の概要

国土の面積： 約75万6千平方km 日本約2倍。

人口： 約1700万人 日本約1/7。

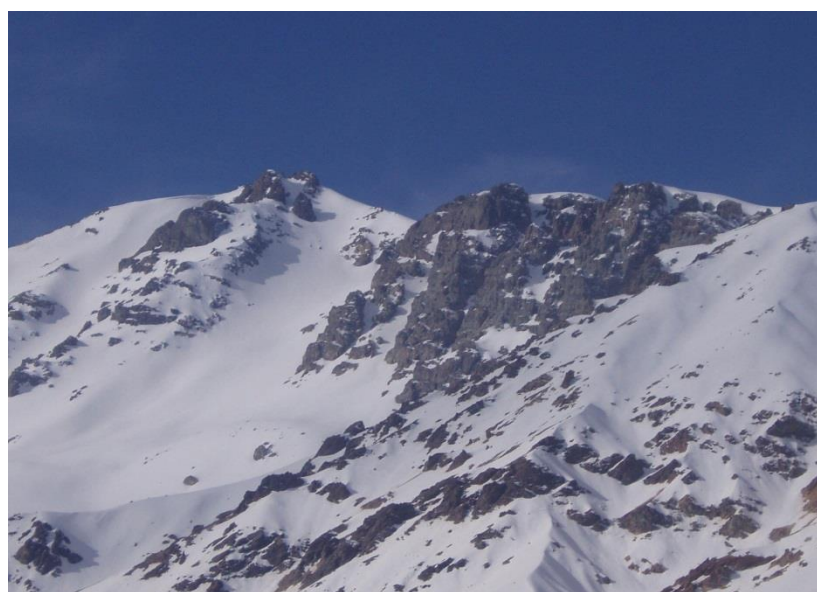
おもな人種： ヨーロッパ系白色人種及び先住民とスペイン系白色人種との混血が多く、全体の90%。

国土の特徴： 南米大陸のアンデス山脈と南太平洋に挟まれた南北に長く東西に細い国で、北はペルーとボリビアに接し、東はアルゼンチンに接して、山岳地帯が多く、平面の少ない国土である。気候は喜多の亜熱帯から南部の寒帯まで非常に幅が広い。



南米大陸

おもな産業： チリの主たる産業は鉱業、商業、農林漁業である。銅鉱山は世界1位、2位、3位にランクされる大きな銅鉱山が全てチリに有り、最大の輸出品目は銅である。他に木材、ワイン、鮭などがあるが、鮭の産業にかかわった日本人の功績は高く評価されている。



輝くアンデスの一廓を占めるテニエンテ銅山

ボランティア業務：

ピチレム市にはまだ下水処理施設がない。市民の下水はラグーナと呼ばれる潟に放流されていた。下水が放流される前のラグーナの景観は湖の様に美しく、その湖畔は市民の憩いの場所となっていた。しかし数年前から市民の下水が流れ込むようになって、悪臭が発生し、やむを得ずそばを通る市民は足早にその場を去っていく状況になっていた。ピチレム市は国に早く市民の下水処理施設を建設してくれるようにとの要望を出していた。私が配属先に赴任した時、国の下水処理計画案がピチレム市に提案された時であった。その計画はエミサリオ計画と名づけられていたが、エミサリオとはスペイン語で放水路とか排水路という意味である。計画の中身は下水を処理しないまま放水管を海の沖1500mまで延ばして放流してしまおうという案である。ピチレム市には「ピチレムを美しくする市民の会」と言う有志の組織があつて毎週火曜日に夜8時から一定の場所に集まって、議論をしていた。私もその市民の会に参加して議論に加わった。ピチレム市には立派な海水浴場があり、夏には大勢の

海水浴客が遠方から集まって市民の経済を支えていた。もしエミサリオ計画が実施されたら海水浴場が汚染されて海水浴客が来なくなるかもしれない、そんな心配から猛烈な市民の反対運動が盛り上がった。その結果エミサリオ計画は国が取り下げて、ピチレム市の下水処理計画案は一旦立ち消えになった。普通の町なら、下水処理は活性汚泥法がもっとも普及している方法である。ピチレム市の人口は約1万人である。常に1万人と安定していれば活性汚泥法を採用すればよいのだが、ピチレム市の場合には多くの海水浴客が訪れる夏場の人口は約7万人ぐらいに膨れ上がる。活性汚泥法の弱点は常に負荷が安定していなければならないことである。人口の変動が7倍もあると対応できなくなる。この大きな人口変動がピチレム市の下水処理計画を難しくしていた。私はピチレム滞在中にこの様な変動幅の大きな負荷の下水処理をどうすればよいのか検討した。任期が切れる最終日に近くなって、ようやく計画がまとまり、ピチレム市民と県庁に対して計画案を発表した。1万人の安定負荷を活性汚泥法で処理し、夏場だけに膨れ上がる短期間の6万人分の負荷を先にあげたラグーナを改造して特別な下水処理案を作り上げてピチレム市に提案した。ラグーナは天然記念物で人口の手を加えて改造することは法律で禁じられているので当分手がつけられない。私の任期が終わって1年後に市民だけの定常負荷を対象に活性汚泥法が建設されたが夏場の大きな変動負荷の処理はいまだに手付かずで放置されたままであるとのこと。



大勢の人で埋まる海水浴

余暇のこと：「ピチレムを美しくする会」のメンバーが時々我が家に遊びに来てチェスをした。私はチェスが弱かったが、私よりもっと弱い

が私をピチレムの郵便局長に紹介してくれた。「この人は 日本から来てボランティアをしているが少しチェスが強いから連れてきた」と言った。チェスの強い郵便局長から「日本から来た人なら囲碁を知らないか」と聞かれたので「少しは知っている」と答えると、チェスはそっちのけで囲碁を教えてくれないかと頼まれた。

現在どの位かと尋ねると全く知らないとのこと、「どうして囲碁を学びたいのか？」と聞くと「ヒカルの碁」と言う日本製のアニメがチリでも人気があって、それを見て囲碁を知りたくなったそうで、それから頻りに郵便局の業務と私のボランティア業務の時間が終わってからが何度も囲碁を教えに行った。郵便局長は非常に熱心に囲碁に取り組んだので私も熱心に教えた。私の任期が切れる直前に彼の實力は5級ぐらいになっていたと思う。私がピチレムを去った後はピチム市で囲碁を打つ人は多分皆無だと思うので首都のサンチャゴに出かけたら相手はたくさんいるとアドバイスした。

アベリオ君のこと：ピチレムからサンチャゴまではバスで片道5時間近くかかるので、めったにサンチャゴに行くことはなかったが2年間の間に数回サンチャゴに出かけたことがある。サンチャゴにはシニア海外ボランティアとして囲碁指導の先生が派遣されていて、チリ囲碁連盟のメンバーに指導していた。その縁でたまに私もサンチャゴに出かけた時、チリ囲碁メンバーと囲碁対局の機会を持つことができた。私がチリに到着してピチレムに赴任する前、1週間ほどサンチャゴに滞在したが、その間にアベリオ君、当時15歳の少年がシニアボランティアの指導員に教わってまだ間もない頃、まだ弱く、多分5級ぐらいでなかったか、指導員がその少年に5子置いてこの人と打ってごらんと紹介してくれた。その指導員はアマ6段格で私は3段格であった。その時はその少年に5子置かせて私が少し勝ったが、1年後にサンチャゴに出かけた時、アベリオ君と対局したがその時はアベリオ君が先で打ってかろうじて私が勝ったが1年の間に驚くほど上達していた。さらに1年後、私のチリ滞在の任期終了直前にアベリオ君と対局したとき、たぶんアベリオ君が私より強くなっているだろうと想像して私は先で打ったが私は負けてしまった。そして2子置かせてもらって打ったがまたもや私の負け、悔しくもあったが

嬉しくもあった。習い始めて2年でアマ3段以上のレベルになるとは、もし日本で育っていればプロ棋士になれたかもしれない。

箸のこと： 日本を出発する時に箸を持って来なかった。サンチャゴ市にあった日本食レストランでは箸があったがピチレムに到着すると日本食レストランはなく、コップや茶わんを売っている雑貨屋に行っても箸は売っていなかった。出来上がった料理をフォークやナイフで食べるのは不便でないが、料理をする時に箸がないと不便だと思うことがしばしばあった。たとえばジャガイモが煮えているかどうかフォークで突き刺して判断はできるが、半煮えの場合、元に戻すときに箸でつまんで戻すようにはできない、やはり箸でつまんで元に戻す方がずっと便利である。赴任して2か月後にサンチャゴに出かけて日本食材などを売っている店で箸を買うことができたがピチレムでは遂に箸の入手はできなかった。日本料理と西洋料理の違いの要素として、料理中に箸を使うか使わないかがかなり影響しているのではないだろうか。

温度計のこと： チリの海岸線沿いの町はどこも夏涼しく、ピチレムの夏は最高25℃、と言われていた。これは南米大陸の西側、チリやペルーの西側の南太平洋では南極から発した冷たいフンボルト海流が北上しているためである。おかげで夏涼しく過ごすことができてよかった。夏が終わり、秋口になって寒くなってくると部屋の温度が気になり、日本から寒暖計をもってこなかったことに気づき、町の商店に探しに出かけた。雑貨屋で温度計はないかと聞くと、「温度計なら薬屋に売ってるよ」と言われて薬屋に行ったら温度計があるかと聞くと、体温計を出してくれた。体温計ではなくて部屋の温度を測る温度計が欲しいのだと言うと、薬屋の店員は不思議そうな顔で、何のために部屋の温度を測るのかと尋ねられた。部屋が何度になっているか知りたいからだと言うと、そんなものを計る温度計は見たことないと言われた。ピチレムに住んでいる何人かの住民に体温計以外の温度計をもっていないかと尋ねると誰も持っていないと言われた。そしてピチレム市内のどの店にも寒暖計は置い

てなかった。無ければ無くてもいいかとあきらめていたが、その数週間後、ラグーナの汚染度を測定するために、サンプル水を採取する時にどうしても水温を計る必要に迫られた。ピチレム市内では買えないことが分かっていたのでバスで片道 5 時間ほどかかるサンチャゴ市まで 1 泊 2 日をかけて温度計を探しに出かけた。サンチャゴ市はチリの首都で人口 500 万人を超える大都市である。ここに温度計がないはずはあるまいと思い、まずスーパーマーケットやホームセンターのような店が集中している地域に行き、温度計を探しているがどこに売っているかと総合案内所で尋ねると、温度計なら薬屋にあると答えられた。薬屋にあるのはやはり体温計だった。体温計ではなくて部屋や水などの温度を計る温度計を探しているのだと言うと、薬屋の店員はそんなものは見たことがない、多分どこにも売っていないと思うと返事が返ってきた。

それからサンチャゴ市内で最も大きなデパートに行って案内係に温度計がないかと尋ねると、やはり薬のコーナーにあると言われたので、体温計ではなくて部屋や水の温度を測るための温度計を探しているのだと言うと案内係はしばらく思案して、別の少し年配の店員に「このお客さんが体温計と違う温度計を探しているのだけど、そんなものどこかに売ってるだろうか」と相談してくれた。年配の店員はしばらく思案して、何か思い出したように、ある店の名前を言ってそこに行くための地図を書いてくれた。この店に行けばあるかもしれない、もしこの店になければチリ国内にはないのだと言われた。その地図を頼りにたどり着いた店は顕微鏡やら天体望遠鏡を展示している店であった。体温計ではなくて室温や水温を計る温度計を探しているのだがこの店にあるかと尋ねると、「ある」と答えがあり、ありふれた普通の寒暖計を店の奥から出してきた。値段を聞くと日本円で 2500 円相当の値段であった。2500 円はチリで最上級の牛肉 2kg に匹敵する値段である。日本でなら 100 円ショップで買える寒暖計 1 本がこんなに高価だと、普通の市民の家に置いて無いのも当然だろうと納得した。

